

## 精神分析のはなし 第18話

**JAM**：ボルヘスはアルゼンチンの偉大な作家ですが、彼は「フェニックスのセクト」というセンセーショナルな小話を書いています。5つの段落から成り立っていて、それ以上ではありません。この教団はどのようなものでしょうか？この話の終わりになってはじめて、ひとはそれを発見します。いや、むしろひとは疑いをもちます。

というのは、はっきりとは言われていないからです。このセクトは人類のことで、奇妙な実践、習わしのなかにその秘密が完全に保たれています。というのは、それは習わし、ある行動、象徴化された行動だからで、それは自分の身体を象徴に貸す、ということを含みます。

このテキストの中でひとは発見し、最後に理解したと考えられるのは、そのセクトの習わしとは、人類であり、それは性交であり接合のことだということです。フェニックスとはファルスの中で、ファルスがその灰から再び生まれます。性的行為はファルスが消えることを消費し、そして多かれ少なかれ大きな時間を経て、ファルスが再び生まれるのです。そうして文学的な手続きにより、もっとも親しみあるものがもっとも奇妙なものとなり、謎めいたものとなります。

このボルヘスの話は私にとり彼の作品のうちで至宝のものです。よくボルヘスの作品にあるように、ひとはかつぐような学識を上演しており、しかしそこから詩が解き放たれます。このセクトの秘密の知に近づくのに、ひとは断片化した指標をもつにすぎません。それは、ずれた、じっさい矛盾したあらゆる文学や指標のなかで、摘まれたものです。そしてボルヘスはこの断片的な知を喚起することに優れていて、そこで彼は交じり合っています。

古代の年代記や、ドイツ理想主義のシステムとか、つまりボルヘスはたくさん読書をしましたが、とりわけ彼はイギリスの百科事典を読みました。そして彼は断片を取り出して、普遍的文化を当てこすって、知というものが本質的に断片化したものであることを理解させました。そして知とはひとつの全体を作るものではないこと、知と呼ばれるものが実はがらくたの堆積であることをひとびとに理解させたのです。

ひとは知る事柄によるこの間接的なアプローチ、ひとは述べたこと、書いたことが、セクトの概念自体に適合しています。秘密であるようなひとつの知をめぐる概念が集められている限りで、適合します。ひとつのセクトの存在は、ふたつのはっきりと区別されるクラスに

人類を分類する効果をもちます。ひとつは知っているひとたち、もうひとつは知らないひとたち、です。

しかしまさにここで、ボルヘスはこの分割の先には進まないのです。ある者たちは決定的にほかの者たちよりも多くを知らないのであると、彼はこの話で明らかにしています。そして私にはそのことは哲学者のヘーゲルが言ったフレーズにこだまするものです。美学のなかのエジプト芸術について、ヘーゲルは「エジプト人の秘密はエジプト人自身にとって秘密である」と述べています。そしてこのテキストの終わりに出現するのは、ある者たち、セクトの信奉者たちとして私たちに提示される者たち、この者たちはあまりに多数なので、最終的には全員が信奉者たちであるということです。

人類とはひとつのセクトのようなもので、セクトが守る秘密によって集められているのですが、その秘密を人類自体は知らないのです。ひとつの知が存在しますが、ひとはそれに接近できません。ひとは行為を、性的行為をすることができるだけ、なのです。知についてふたつの大きな側面が西洋人とよばれる者たちを占めていました。そしてラカンが彼らを西洋した人たち *occidenté* と呼んでいました。

知の、このふたつの側面とは、ギリシャの知とエジプトの知のことです。

ギリシャの知とは、並べられた知、陳列された知であり、そのモデルは数学です。しかし数学自体がまずひとつのセクトの知のように、数学者たちのセクトのように出現したことを忘れておきましょう。数学者たちは自分たちの知を実践するために、シテから孤立していました。彼らは文明のなかで多くの成功を収めたセクトであると、言わなければなりません。そして当時まったく新しい、大変強固なひとつの現実によって方向づけられたセクトでした。「証明」に基づいていて、その証明は大きな白いパネルのうえに盛大に誇示されていました。

そんなふうに、数学は始まったのです。そしてそこで、もうあなたは何も言うべきことはありません。それは閉じられたもので、すべてがそこにあり、置かれたのです。

そして知の別の側について。エジプトの知、ミステリアスな知が存在します。書かれたもののなかに隠されたものです。最接近して見に行くべきだ、解読を試みなければならないと、まずひとが思うはずのものです。つまり、ある一定数の記号をほかの記号によって置き換えることで、その記号はあなたにとって何事かを言うかもしれません。

ギリシャの知とエジプトの知とは、対置されるべきものです。

片方に、マテーム、数学の本質があり、もう一方にはミステリーが存在します。ミステリーとはある者たちにとり、あるセクトにとって存在し、マテームはすべてのひと、人類のために存在します。たとえばヴォルテールは、数学によってしか誓いを立てませんでした。彼は哲学辞典の「セクト」の項目に、「幾何学においてセクトはまったく存在しない。ユークリッドも、アルキメデス主義者も、まったく存在しないらしい。真理が明らかの場合、党や分派を育てるのは不可能である。正午に日が昇るからと言ってひとは決してけんかしなかった」と書いています。

これはあきらかにナイーブさというものです。正午に日が昇るかを知るため、完全にひとはけんかすることができずし、その上、18世紀には諸幾何学とひとがまだ書き得たようなものとしての、「幾何学」は現在存在しません。

しかしボルヘスの話はヴォルテールに異論を唱えます。仮に数学が存在するとしても、ミステリーは残る、それはすべてのひとのためのミステリーであり、決して数学化されることのできないものである、と。それは性別のミステリーのことです。

ところで、その点、精神分析は、ギリシャとエジプトのあいだで分かれたれ引き裂かれています。片方は、無意識の知で、これは解説すべきものであるかぎり、エジプトタイプのもので、古代エジプト芸術へのフロイトの情熱は知られています。そしてもう片方は、フロイトの本質的参照というものがあり、それは科学的ディスクールのことです。

ボルヘスの話において、問題となっているセクトは書籍により、うわさにより導入されています。そして徐々に、セクトはあらゆる個別性を失っていきます。セクトのひとびとは、一彼らがそう呼んでいるのですが、ジタンの人たちではないし、ユダヤ人たちでもありません。彼らはほかの人たちと混じっています。彼らが迫害されていなかったことが示しているように。そこには人間のグループはまったく存在していません・・フェニックスの賛同者がいるようなグループには。彼らは聖なる本も持たず、共通の記憶もなく、彼らのラングももっていません。ただ、ある習わしが存在しています。

ここで私はいくつかのフレーズを読みあげてみましょう。

「私は旅人たちの報告を調べた。私は長老や神学者と会話を交わした。私は習わしの遵守こそが唯一、セクトの宗教的实践であると確証することができる。習わしが秘密を打ち立てる。秘密は世代から世代へ伝達される。しかしそれが母親や司祭によって子に教えられるのではないことを、しきたりは求める。行為自体は平凡であり、瞬間的であり、叙述を要求しない。この宗教行事のために特別捧げられた寺院は存在しないが、廢墟、窪み、庭がふさわしい場所とみなされている。その秘密は聖なるものだが、少し滑稽なことも否めない。その実践はひそかで地下のものですらあり、信徒はそれを語らない。戦後にそれはできたものである。それを名付けるのにふさわしい語は存在しない。しかしすべての語はそれを指している、いやむしろ、すべての語はそれを必然的にほめかしていることは、暗黙の了解である。私は3つの大陸においてフェニックスの多くの信奉者の友情に値したものだ。最初、秘密は彼らには平凡、苦しい、卑しいものと思われたと確信している。そしてより奇妙で信じられないことは、彼らの祖先は似たような訓練にまで自分を低くしたということ、彼ら自身認めたがらないことだった。その秘密がもうずいぶん前に失われたことは、奇妙なことである。地球の変遷、戦争と大移動にもかかわらず、それはすべての信徒たちに起きることである。ある者は「それは本能になった」と主張してはばからない。」

ですから、このテキストは力強い口調で、性的行為、性行為を謎めいたものになっています。テキストはほめかすにとどまっています。テキスト自体が、解読すべきものになっています。ひとが「なにが問題になっているのだろうか？参照しているのは何だろうか？」と問うように作られているのです。

プレイヤー版の注記にあるのは、あるインタビューのなかで、ボルヘスは、その断片、を、かじったということです。彼は一度そう言っています。この行為について私が最初に耳にしたとき、私は小さい男の子でしたが、私は父と母がそれをやりとげてしまったのだという考えで、頭が混乱してしまいました。それは唾然とする発見でしたが、それは不死の行為、不死のための習わしであると、言うことができるのではないのでしょうか？

もしそれについてよく考えてみるなら、このテキストにおいて、アルゼンチン作家は限界まで、啓蒙精神、ヴォルテール精神を推し進めているのです。現実界が、どれほど理性的であろうが怪奇に回帰する点にまで、彼は推し進めているのです。

啓蒙精神はまず習慣が存在すると定式化することにあります。「私たちの仕方だけがあるのではない。ほかの仕方もある。習慣は本質的に国民、伝統により多様なものであり、人類はそのなかで分割されているのである。これらの習慣が多様でありそれらの信仰も多様であるということは、私たちもほかの者たち同様、見せかけにすぎないことを示しているのだ。私たちの習慣は必要な基礎をもっていない。それらは発明である。最良の発明を選択することが肝心であり、それがこの人類にたいして一番害のないことである」ということを定式化することになったのです。

啓蒙時代の問い、それはモンテスキューの問いです。ひとはどのように洞察的でありうるのか？その問いこそ、あれほどその時代、その国民の習慣に賛同する者が提出したものであり、彼らはなぜほかの者がほかのやり方でしているのかを理解することができず、そのことに驚いてもいたのです。まさにそれこそ奇妙な感覚を示す問いです。外国人の習慣と信仰を前に、ひとがとられるかもしれない感覚です。

よろしい。ボルヘスのあの小話のなかでは、それは自らにとっても奇妙なものとなった人類自体のことです。ひとはどのように男性になり、どのように男性、女性になるのか？性的行為の水準では、謎として現れるのは人間の条件自体です。詩的には「愛をなす」と呼ばれる、かくも信じられないようななにかに、ひとはどうして身をゆだねるのか？

しかしあるセクトにそのことを報告すること、性的行為をセクトの概念によって提示することは、つねに秘密のままとどまるような、性についての何かが存在することを示しています。そういう理由で、人類は、この観点からは、ひとつのセクトのように叙述され得るのです。このテキストを活気づけているのは、まさにそのパラドクスなのです。

セクシャリティについて、各自はみんなに対して自分の秘密を隠すべきであるかのように、振舞っています。その秘密は、すべての人にとり秘密であるにもかかわらず、そうしています。セクシャリティは、すべてのひとが実践するひとつの秘密であり、それはしかしながら各自にとっての秘密にとどまります。性的関係においては、何かがどうしようもなく秘密に、覆われて、不在としてとどまっているのです。

そしてそれは文学全体のなかでももっとも素晴らしい得も言えぬテキストであり、「性的関係のなさ」がなにを意味しているのかを、演出しています。「ある者は『それは本能になっ

た』と主張してはばからない」という、習わしについての最後のフレーズ、これは本能とはひとが優れて理由は分からないが行っていることがらだ、ということです。このパースペクティブにおいて、時間は問題を生むものとなります。ボルヘスは「時のあらたな反論」とよばれるテキストも書いていますが、時に反論するものとは、「反復」のことです。

時に勝利するもの、さらに（アンコール）の力とともにもう一度再生するもの、それはファルスです。性的習わしの行事であり、そのセクトの人たちで閉じられた性的秘密の行事です。そういう理由で、ひとはつねにこの秘密についてもっと学ぼうと努めます。私がほのめかしたテキスト、ボルヘスの「時のあらたな反論」のなかで、ひとはこのフレーズ「ただ一度だけの反復では足りないのではないか？」を見つけます。世界の全歴史を崩壊させ混ぜ合わせ、この歴史が存在しないということを出現させるために、です。

よろしい。反復する唯一の語、世界史を崩壊させるもの、歴史が存在しないことを出現させるもの、それは性的行事、性交、性的行為です。世界史を消去する権力を持ち、自然と文化とがそこに互いに合流し、性的行為はふたつの平行な次元が秘密のなかに合流する無限の一点に、接近を与えます。しかし、知とはここで、これについては確かに、大いなるパロールと言いうるものであり、彼らは行っていることを知らないのですから、彼らをどうぞ許してください。